

司馬遼太郎

菜の花の沖
〈五〉



司馬遼太郎

の花の沖
五



菜

菜の花の沖五

昭和五十七年十月二十五日 第一刷

定価 千二百円

著 者 司馬遼太郎

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―三
電話 東京 二六五―一二一一

印刷 大日本印刷
製本 大日製本

万一、落丁乱丁の場合はお取り替え致します

目次

林蔵 7

高田屋雜記 32

ロシア事情 45

続・ロシア事情 118

レザノフ記 157

カラフト記 199

暴走記 231

ゴローニン

275

嘉兵衛船

326

あとがき

349

題字 裝幀
中田 栗屋
功 充

菜の花の沖
五

林 蔵

海が、春になった。

その朝、昇りはじめた陽が兵庫の和田岬の松原を隈深く照らしたが、そのまま陽が高くなっても雲がさえぎらず、吹きつづけている微風は、真綿のようにやわらかかった。

うまれたばかりの八艘の船が、すでに兵庫の浦風のなかで、帆柱と船尾をそろえてならんでいる。

出港の準備はおわっていた。

このうちの五艘が、官船であった。そのことは、帆柱まで赤く塗られていることでもわかるが、五艘のうちの高官座乗用の柔遠丸・瑞穂丸（ともに三百五十石積）は関船（防禦用の戦闘船）だけに、猫がねずみをねらうときの姿勢のように、船首は低く、船尾は高く、いかにも精悍な感じがした。八艘のそれぞれの船頭は、乗りこんでしまっている。関船である二艘は廻航用で、船の安定を得る程度の荷しか積んでいない。船頭は、柔遠丸が嘉蔵、瑞穂丸が善兵衛であった。

嘉兵衛は、惣船頭——船団の長——として、柔遠丸に乗ることにしていた。かれはまだ陸にいた。

林 蔵

この朝、嘉兵衛は、西出町の家を出たあと、おふさが縫ったあたらしい羽織を着て、北風家へ出港のあいさつに行つた。莊右衛門は病中ということで会えなかつたが、番頭に、いまから蝦夷地に参ります、およろしく、といつておいた。

浜に出ると、早朝というのに、たいそうな人だかりであつた。八艘がことごとく日ノ丸の船印をたて、紅白の吹流しをひるがえしているのは、壮観というほかなかつた。

浜で、意外なことがあつた。

病気でひきこもっているはずの北風莊右衛門が、大柄な小僧二人にささえられて立っていたのである。

「見送りにきた」

と、莊右衛門がいった。

兵庫浦の事実上のぬしともいうべき北風莊右衛門が、他の廻船問屋の船の船出を見送りにくるなど、ありうべからざることであつた。さらにいえば、相手は、北風家からみれば、自家の沖船頭（雇われ船頭）あがりの男なのである。

「これは、痛み入ります」

嘉兵衛も、どうあいさつしていいかわからず、ひたすら恐縮した。

「嘉兵衛どん、あなたは何といつても大公儀の定御雇の御船頭じゃ」

嘉兵衛は、官船を指揮する定御雇の船頭として、大小を持っている。ただし大小とも束ねて風呂敷にくるんで持っていた。

莊右衛門の表情に多少の皮肉がまじっていたが、すぐ消えた。

「今後、私の養子どんをよろしくたのむ」

と、頭をさげた。

ゆくゆく東蝦夷地（千島をふくめる）の開発がすすむにつれ、海産物の産額が大いにふえるにちがいない。幕府はその御用取扱を有力な業者何人かに命ずるにちがいないが、そのときはよろしくたのむ、というのである。

そのことは、嘉兵衛のほうでむしろ積極的に考えていた。嘉兵衛は、他の者に聞こえるように大声でひきうけた。

莊右衛門はこの翌年に病没する。

この春（享和元年・一八〇二）、嘉兵衛、三十三歳。

かれが、春の日本海を、八艘の船団を組んで蝦夷地へくだった航海こそ、かれの事業の基礎がためをなしたといつていい。

この春は、氣候が不順であつた。このため、嘉兵衛は十分に用心をし、日数をかけて航海した。（うれしいことだ）

と、ひそかに思つたのは、これまでの嘉兵衛は航海に大事をとりつつも、つねに日数を縮めることに苦心し、無理な航海をしてきた。日数を縮めることが、廻船業にとっての利益であるためであつた。

ところが、このたび、八艘のうち五艘の官船にかぎつては、幕府から廻航費が出ていた。一艘について三百両、計千五百両という大きな額であつた。船頭以下の賃銀ということになっているが、賃銀がそれほど大きいものではない。

この計算は、船頭以下がもし荷船で行つたならば一艘につき片道三百両もうかる、ということ

から出ている。

この約束も、嘉兵衛はすでに箱館において蝦夷地御用の高官とのあいだで結んでいる。

ただし、実際には幕府のふところは痛まない。二艘の関船には金になるほどの荷は積んでいないが、他の三艘の荷関船にはたっぷり上方商品を積んでいる。

それを、寄港するさきざきで売り、最後に松前や箱館で売れば、一艘について三百両ぐらいの利は出るのである。それを嘉兵衛は、廻航費としてもらうことにしていた。

積荷のなかには、幕府のエトロフ（択捉）島開発のために必要な資材もあった。魚を塩蔵するために必要な塩だけで二千俵、塩ものにした魚を詰める樽が二千個、それに魚肥を梱包するための蕤^{せう}、俵^{はたけ}、吠^はなどである。樽は日本一の樽どころである摂津西宮で買い、塩は播州赤穂でもとめ、蕤などは越前敦賀^{つるが}で仕入れる。

（この程度のをわざわざ上方からもってゆくのは厄介なことだ）

と、嘉兵衛はおもっていた。せめて蕤ぐらいは、ゆくゆく津軽・南部の産業を刺激してそこで買いたいと思っている。樽も、津軽・南部の職人ではまだ堅牢なものがつくれないが、技術指導をしてゆけばきつと向上するにちがいない。

ついであるが、五艘の官船の建造費は、大坂町奉行所を通して、尼崎屋吉左衛門に支払われていた。三百五十石の関船は一艘につき五百両、七百石の荷関船は、一艘につき千両であった。

ふつうの建造費より三割以上も高いのは、蝦夷地の海をゆくための特別な仕立になっているためであった。たとえば船底の基礎材である航^{かう}の厚さが一尺もあり、また船を横波からふせぐ上棚^{うわだたけ}が、厚さ五寸ほどもあった。

それに、二艘の関船には、調査用の子船として、五、六十石積の飛船^{とびぶね}が一艘ずつ載せられていた。

嘉兵衛がひきいる八艘の船団が、津軽海峡を前に見る津軽半島に達したのは、北の春も開け、北東の海風がしきりに吹いているところであつた。

嘉兵衛は、三厩（三馬屋）湾に入り、その浦に投錨した。

「風を待つ」

と、一同に言いわたした。嘉兵衛がみずから一艘を指揮してわたるなら多少天候の条件がわるくても自信があつたが、八艘をそろえてこの名だたる難所をわたすには、よほどいい条件の日をえらばねばならなかつた。

三厩の浦は、蝦夷地への渡航のための跳躍台ともいうべき場所で、海峡にむかつて口をあけており、背後に一山脈があり、西北の竜飛崎で尽きる。浦の背後には増川岳があつて、風むきによつてはこの山が吹きおろしてくる風のために碇泊船もはげしくゆれた。

三厩は、津軽領である。

嘉兵衛は、この三厩に碇泊中、土地の船を雇い、南部領の野辺地の出張所に荷を送り、かつ、「筵を買いあつめて、箱館の蔵まで送つておけ」と命じた。

さらに別に船をやとい、松前の城下（福山）へ古着を送る手配をした。古着は、空樽の中に詰めてきたために、ふたをあけてとりださねばならなかつた。

三厩にいるとき、眉の濃い老農夫が訪ねてきた。

「エトロフ島に行かれるとききました、私の願いをききとどけてくださるでしょうか」という。幕府は、津軽藩と南部藩にエトロフ島警備を命じている。両藩の警備兵はすでにシヤ

ナ（紗那）村に警備屋敷をつくって駐屯しているはずだが、この老人の息子もそこにいて、という。願うというのは、手紙と手帳一冊、それに金創（きんじょう）（刃物でうけた傷）の薬少々をとどけてほしい、ということであつた。

「ようござす」

嘉兵衛は、ひきうけてやつた。

ただ不審だつたのは、老人がどうみても貧農の風体であるのに、息子が津軽藩士であるというのはどういふことかということであつた。

「このたび、悴（せがれ）が足輕におとりたてになりましたので」

と、迷惑そうにいう。きくと、蝦夷通詞だというのである。息子は四郎大夫というが、それは世襲名で、自分も息子に世をゆずるまでは四郎大夫と称していた、と言ひ、じつをいうと、津軽蝦夷の乙名（むな）（酋長）の家筋だ、というのである。

「これはよいお人に会えた」

と、嘉兵衛は大いによろこんだ。三厩付近には蝦夷筋目の古い家々が残っていると聞いたが、実際にその人を見るのははじめてであつた。

「いやもう、言葉もわすれはてて」

と、老人は悲しげにいう。息子にいたつては言葉は何一つ知らないのに蝦夷筋目というだけで、通詞にさせられたという。

老人が嘉兵衛に託した手帳は、手製の辞書であつた。息子が出発したあと、三厩湾の湾岸に生き残っている蝦夷語を採集してきてつくつたのだというのである。

嘉兵衛にも、自製の蝦夷言葉の手帳がある。かれは老人の手帳を繰りつつ、もし不足している

言葉があれば書き足しておいてあげようといった。

三厩から津軽海峡を乗りきるには、東南のつよい風を待たねばならない。船乗りによつては、「東風土石を巻き揚げる烈風にあらずれば、急灘を越ゆることなりがたし」

などと、物の本に書かれているとおりの風を得るまで待ちに待つ。

嘉兵衛は八艘そろえて箱館の浦に入りたかったため、その種の理想的な風を待った。

ある朝、夜の幕がさがりきると、うってつけの風がはげしくなった。嘉兵衛は八艘の船にいつせいに帆をあげさせて北航した。

この海峡の潮が西から東へ流れているということについては、すでにふれた。

津軽半島が海峡につき出ている最先端が竜飛崎だが、その付近の潮流がもつともはげしく、かつ幅がひろい。

沖までつづいている。四方から大波が寄せ、たがいにもみあい、このため水面が盛りあがって、船よりも高く感じられる。

海峡の中ほどを流れている中ノ潮までくると、たれもが胸をなでおろす。すぐそのあとが、むこう岸の急潮である。ただし、幅はせまい。

嘉兵衛の八艘の船は、みごとに帆をそろえて海峡を乗りきった。

箱館湾に入り、やがて海につき出た箱館山にまもられた浦に入ったとき、浜に出ているひとびとから歓声があがった。箱館じゅうのひとが浜に出たかと思えるほどに八艘の船の入港はひとびとを沸かせた。

よく見ると、浜の正面に幔幕が張られているのが見えた。

(信濃守様か)

と思ううちに、五艘の伝馬船がこちらにむかってきた。

嘉兵衛もすぐさま伝馬をおろし、出むかえる態勢をとった。松平信濃守忠明、羽太正養^{はづとまさやす}までは確認できたが、いま一艘に乗っている高官がよくわからなかった。

(石川左近将監様ではないか)

という見当はついていた。

石川左近将監忠房は、勘定奉行である。

幕府の勘定奉行がいかに重職であるかについては、幾度かふれた。

幕府のいっさいの財務を主宰している。それだけでなく、いわゆる関八州をはじめ全国に散在する天領、旗本領の行政を見、所属人民からの訴訟を取り扱う。天領の代官も郡代も、ことごとく勘定奉行の配下である。ほかに切手^{きりて}米手^{こめて}形奉行、蔵奉行、金奉行、道中奉行などをも支配する。幕府はつねに一つの職を複数でやらせるため、この時期の勘定奉行は石川忠房のほかに三人いた。そのうち忠房だけが、蝦夷地御用掛を兼務している。松平忠明らと同役であった。ただし忠明は専任の蝦夷地御用掛であったが、忠房は江戸にいたままこの御用掛をつとめることになっている。蝦夷地開発には、莫大^{ばくだい}な出費が必要だからである。

「在府のまま」

という立場ながら、職責上、蝦夷地の土を踏んでおく必要があるため、箱館まできているのである。第一、嘉兵衛がこのたび建造した二艘の関船のうち、瑞穂丸が、石川左近将監の座乗用のものであった。

かれらは、むろん嘉兵衛を出迎えたのではなく、新造の座乗船に敬意を表すべく海上に出てき